

令和 6 年度 8 0 2 0 公募研究事業
研究報告書抄録（採択番号 24-5-14）

研究課題：垂直歯根破折の予防と予知性の高い治療法を目指した多施設臨床研究

研究者名：長澤麻沙子，魚島勝美，Kooanantkul Chuta

所 属：新潟大学大学院医歯学総合研究科生体歯科補綴学分野

【背景】

公益財団法人 8020 推進財団の調査によると，日本の永久歯の抜歯原因の第 3 位は「歯の破折」である．前回の調査と比較すると，齲蝕や歯周病による歯の喪失は年々減少している一方で，破折による喪失は相対的に増加している．従来，歯根破折に対する対応の多くは「抜歯」もしくは「経過観察」であったが，4-META/MMA-TBB レジンセメントを応用することにより，その接着力の高さ故に垂直歯根破折歯に対する治療が可能となった．しかしながら，世界的にも見ても，歯根破折歯修復の臨床データは少なく，治療法に関する研究開発もほとんどなされていないのが現状である．

【目的】

本研究では垂直歯根破折歯の予防・治療法の確立のため，臨床研究として，歯根破折歯の病態，歯根破折歯修復法による予後を明らかにする事を目的とする．これまで単独施設で行ってきた歯根破折治療の詳細および予後調査を多施設で行うことで，歯根破折歯修復の成功率をさらに向上させ，予知性のある歯根破折歯の治療の方法を見出すことができると考える．

【方法】

本研究は（１）歯根破折歯の病態解明を行うことで歯根破折歯の予防および診断法の確立を行い，（２）歯根破折歯修復処置の予後を考察することで予知性の高い歯根破折歯の治療と長期予後を期待する．はじめにデータ収集のためのプロトコールを作成する．その後，各対象患者，対象施設にてデータの収集を行い統計解析・考察を行う．対象施設は新潟大学医歯学総合病院冠ブリッジ科外来，新潟県厚生連糸魚川総合病院歯科，北海道大学歯周・歯内療法学講座外来および眞坂歯科医院（東京・開業）である．

【結果】

新潟大学附属病院では歯根破折歯修復後の 3 年生存率は 82.4%，5 年生存率は 70.1%であった．他共同研究施設においても同様の結果となった．

【考察】

これは本治療が抜歯に代わる保存的な処置として有効であり，歯根破折歯に対する治療の選択肢となる可能性が高いと考えられる．また，咬合支持数が多い口腔内で歯根破折が頻度高く発生しており，破折歯の抜去は咬合崩壊の端緒となる可能性があるため，破折歯を抜歯せずに保存して機能させる意義は大きいと考える．